

2023年6月刊行予定

# 平和学事典

日本平和学会 編



最新情報・詳細は  
↑こちらから  
丸善出版ホームページへ

A5判・778頁 定価26,400円(本体24,000円+10%) ISBN978-4-621-30808-0

平和学とは、何が平和を脅かすのか、そして何が平和の基礎となるのかを究明する学問です。「戦争の不在」を実現するために誕生した平和学は、ガルトゥングによる平和の再定義を契機として「暴力の不在」として再定義されました。そこには、個人・集団の実力や国家の武力などに代表される直接的な暴力だけでなく、人間にとって自発的に同意しがたい社会的不正義としての構造的な暴力も含まれます。本書は、直接的暴力論を事典前半に、構造的暴力論を事典後半に配置する構成をとっているため、平和学(研究)の歴史的経緯を理解できる構成となっています。日本平和学会を編集母体として、計276項目を立項した日本の平和学の総力を結集した初めての学問事典です。

## 関連書籍



### 地理学事典

日本地理学会 編

A5判・844頁  
定価26,400円(本体24,000円+税10%)  
ISBN978-4-621-30793-9

総合の科学とも文理融合の科学とも称される地理学。本書では基礎知識、自然領域、人文領域、応用と現代的課題に分けて解説。



### 現代地政学事典

現代地政学事典編集委員会 編

A5判・888頁  
定価26,400円(本体24,000円+税10%)  
ISBN978-4-621-30463-1

現代の地政学は複雑化する空間と政治を考察する学問へ変貌しつつある。国家以外のアクターも分析の射程に入れた「新しい」地政学を構築する事典。



### 国際開発学事典

国際開発学会 編

A5判・638頁  
定価22,000円(本体20,000円+税10%)  
ISBN978-4-621-30340-5

国際支援、効率的な援助、現地との合意形成など、諸分野にまたがる国際開発学をそれぞれの専門家が1項目2ページで解説する。



### いまを生きるためのシリーズ いまを生きるための倫理学／社会学／宗教学

倫理学：盛永 審一郎・松島 哲久・小出 泰士 編  
社会学：友枝 敏雄・樋口 耕一・平野 孝典 編  
宗教学：島園 進・奥山 倫明 編

四六判・338/344/328頁  
各 定価4,180円(本体3,800円+税10%)  
ISBN978-4-621-30441-9/30555-3/30687-1

私たちは現代をどう生きればいいのか? 「倫理学」では生命、環境、教育から家族に至るまで、「社会学」では災害・グローバル化・AI化など現代人が直面する社会問題について、「宗教学」では宗教の歴史や現状、社会的側面・哲学思想的側面などについて、各テーマに精通する専門家がやさしく解説。

**丸善出版株式会社** 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-17 神田神保町ビル 営業部  
TEL(03)3512-3256 FAX(03)3512-3270 <https://www.maruzen-publishing.co.jp>

**丸善出版株式会社 行 FAX 03-3512-3270**

注	平和学事典 定価26,400円(本体24,000円+税10%) ISBN978-4-621-30808-0	冊
		冊
文	お名前	
	ご住所 〒	
書	TEL	

取扱店

※ご注文をいただいた個人情報は、書店、取次(流通)・弊社間で商品手配の目的に利用させていただきます。

tkp.23.A0Be

# 日本平和学会設立50周年記念出版

# 平和学事典

日本平和学会 編

A5判・778頁 定価26,400円(本体24,000円+10%)  
ISBN978-4-621-30808-0

## 平和学を網羅的に扱った中項目事典

### 編集委員長

石田 淳 (東京大学大学院総合文化研究科 教授)

### 編集幹事

黒田 俊郎 (新潟県立大学国際地域学部 教授)

竹中 千春 (立教大学法学部 兼任講師)

### 編集顧問

阿部 浩己 (明治学院大学国際学部 教授)

小田 博志 (北海道大学大学院文学研究院 教授)

君島 東彦 (立命館大学国際関係学部 教授)

佐々木 寛 (新潟国際情報大学 教授)

島袋 純 (琉球大学教育学部 教授)

毛利 聡子 (明星大学人文学部 教授)

### 編集委員

青井 未帆 (学習院大学専門職大学院法務研究科 教授)

板橋 拓己 (東京大学大学院法学政治学研究所 教授)

奥本 京子 (大阪女学院大学国際・英語学部 教授)

木村 真希子 (津田塾大学学芸学部 教授)

黒崎 輝 (福島大学人文社会学群 教授)

佐伯 奈津子 (名古屋学院大学国際文化学部 准教授)

佐藤 史郎 (東京農工大学生産学部 教授)

清水 奈名子 (宇都宮大学国際学部 教授)

蓮井 誠一郎 (茨城大学人文社会科学部 教授)

二村 まどか (法政大学社会学部 教授)

### 編集補佐

近江 美保 (神奈川大学法学部 教授)

加治 宏基 (愛知大学現代中国学部 教授)

上野 友也 (岐阜大学教育学部 准教授)

小松 寛 (成蹊大学アジア太平洋研究センター 主任研究員)

下谷内 奈緒 (津田塾大学学芸学部 講師)

(五十音順 ※所属・肩書は2023年1月現在)

## 丸善出版

◆電子書籍のお求めはこちら

Mel Kinodan LibrariE KW UNIV honto Kindle  
Maruzen Kinokuniya TRC-DL Knowledge Co-op

# 目次

## 序章 平和研究の現在

戦争・暴力・平和／変わりゆく時代を見つめる平和研究の眼差し／憲法の平和構想／平和研究の再定位——「文明」転換の学へ／不干渉と不処罰／平和論の歴史的文脈／自由主義と平和／戦後責任・平和責任

## 第I部 戦争と平和

### 第1章 戦争と平和をめぐる論争

安全保障の 딜レンマと安心供与／核なき世界／戦争・戦場経験と平和観／平和と安全保障／抑止と防衛／軍備縮小と軍備管理／軍備削減の一時的アプローチ／日本の再軍備／民主主義と平和／全面戦争と限定戦争／基地の機能とネットワーク／軍産複合体／軍民両用技術／大量破壊兵器／通常兵器／核の国際管理／核不拡散体制／核兵器禁止条約／非核兵器地帯／核の傘／核兵器使用の自制／キューバ・ミサイル危機／イラク戦争と大量破壊兵器／朝鮮半島の核危機／イランの核問題／非核政策と核密約／原爆神話

### 第2章 破壊と和解の20世紀

二つの世界大戦／第一次世界大戦の起原／ウィルソンとレーニン、二つの「平和」／第二次世界大戦の起原／ホロコースト／占領と憲法(イタリアとドイツ)／ニュルンベルク裁判／東京裁判とBC級戦犯裁判／朝鮮半島の分断と朝鮮戦争／サンフランシスコ講和／日ノ国交回復／日韓国交正常化／日中国交正常化／日朝国交正常化／ドイツの戦後和解／ヨーロッパ統合／バンドン会議(アジア・アフリカ会議)／植民地責任／ベトナム戦争／冷戦期アメリカの同盟戦略／NATOと核兵器／ドイツの被追放民と東部領土問題／西ドイツの東方政策／欧州安全保障協力会議(CSCE)／反核運動／ゴルバチョフの新思考／ドイツ統一／北欧における平和の模索

## 第II部 人間と国家

### 第3章 犠牲の受忍から補償・保護へ

戦争被害受忍論／戦争責任・戦後責任／国家主権と国際人権保障体制の拮抗／解放と政治的暴力／日本の植民地責任／日本軍と戦争犯罪／法廷と教科書の中の「戦争犯罪」／「慰安婦」／徴用工・強制労働／国籍と無国籍／在日朝鮮人／被爆者／靖国神社と戦争の犠牲／国家の形成と難民の発生／イスラエル・パレスチナ紛争／自決権と国家の独立／東ドイツの平和革命／先住民族とその権利／人種主義と遺骨返還問題／少数者の権利／移民労働者／沖縄戦／米軍基地問題における沖縄／沖縄返還／基地移設問題／「沖縄問題」とジェンダー／人間の安全保障／国内避難民の発生と保護／国際的な難民保護をめぐる現代的課題

## 第III部 平和の制度化

### 第4章 憲法と安保の相剋

軍事同盟と憲法／憲法と安保の相剋／憲法の平和主義と国際法／安保法制(2015年)／日米安保と地位協定／比較の中の憲法9条／9条成立史／憲法改正論と戦後日本の平和／9条と世論／非武装平和主義と立憲主義／安全保障政策と民主的統制／安全保障とデモクラシー／戦争と秘密／非武装永世中立論「普通の国」論の日独比較／自衛隊(安保政策)／専守防衛(安保政策)／武器禁輸政策(安保政策)／文民統制(安保政策)／自衛隊の合憲性／2014年閣議決定による解釈変更／駐留米軍の合憲性(裁判)／9条関連訴訟(裁判)／平和的生存権(裁判)／統治行為論(裁判)

### 第5章 国際社会における平和と正義

国際の平和と安全に対する脅威／国際刑事裁判の試みと国際平和／国際社会の平和と正義／平和条約(講和条約)と「勝者の平和」／戦争と法／集団安全保障体制／紛争の平和的解決／国際平和と国連／平和のための結集決議／国連平

和(維持)活動／国連平和(維持)活動とアクターの多様化／平和のための戦争／正義のための戦争——人道的干渉／自衛のための戦争／ジェノサイド(集団殺害)・人道に対する(犯)罪／「平和に対する罪」・侵略犯罪／国際刑事裁判所・体制移行と移行期正義／紛争終結と移行期正義／真実の追求か過去の忘却か／移行期正義の諸相／平和構築と持続可能な平和／自由主義平和構築論と「ハイブリッドな平和」／人道的介入から保護する責任へ／人道主義と人道支援／安全保障・人権・開発／ジェンダーの主流化／テロリズム

## 第IV部 平和研究の視点

### 第6章 平和研究の暴力観

構造的暴力／原子力災害／成長の限界／トリクルダウン理論／グローバル化と底辺への競争／サブシステムの破壊と収奪／搾取工場／紛争資源／資源の呪い／プランテーション開発／飢餓／貧困とグローバル化／開発・環境難民／児童労働／共有地の悲劇／地球環境汚染／四大公害事件／公害輸出／グリーンウォッシュ／軍事安全保障と環境破壊／核兵器開発の被害／核のフォールアウト／原子力の平和利用と軍事／東京電力福島第一原子力発電所事故／3.11からの「復興」／核燃料サイクル／気候変動／予防原則／健康への権利の不平等／感染症／サイバー攻撃／戦争／宇宙の軍事化／無人兵器

### 第7章 社会における分断

共生と分断／パターンリズム／アイデンティティ・ポリティクス／人種主義／アパルトヘイト／ダリット差別／部落差別／ジェンダー不平等／性暴力／戦時性暴力／性的マイノリティ／優生思想／イスラモフォビア／排外主義／ヘイトクライム／嫌韓反中／逆差別／非人間化／政治的イデオロギー／ポピュリズム／富の再分配／ゲーティッド・コミュニティ／受益圏と受苦圏／低認知被災地／「自己責任」論／情報通信技術(ICT)と社会の分断／マイクロアグレッション

## 第V部 平和をめぐる認識と表象

### 第8章 平和の主体と行動

状態としての平和から過程としての平和へ／市民社会の平和創造力／社会的主体としての市民／川崎基本の平和運動／琉球独立運動／LGBTの市民運動／ケア労働と移民／社会的主体としてのこども・ユース／婦人国際平和自由連盟／女性国際戦犯法廷／女性の軍事動員と主体性／東北アジア市民社会の主体性／ルワンダの和解プロセス／世界宗教者平和会議／社会的起業の役割／弁護士役割／平和への権利(平和権)／知る権利／住民投票・国民投票／平和博物館運動／戦争体験の継承／被爆者証言／歴史教科書問題／市民運動としての「持続可能な開発目標」／サブシステムの紛争解決と紛争転換／狭義の平和教育と広義の平和教育／フィールドワーク／エクスポージャー

### 第9章 暴力の文化から平和の文化へ

芸術家と平和家との間の相剋／生命と平和／平和の文化と戦争の文化／平和の記憶／選ばれる平和の表象／表現の自由／戦争画／平和と絵画／戦争と音楽／平和と音楽／戦争の文学／植民地主義と文学の想像力／紛争と演劇／平和とダンス／戦争のドキュメンタリー映像／ファシリテーションとストーリーテリング／クリエイティブ・アーツ／芸術アプローチによる平和ワーク／教育によるエンパワメント／心理学による紛争アプローチ／トラウマと癒し／和解／修復的正義／正義理論の言説空間／ジェンダー正義／ミクロからマクロの平和／死者と平和

## 第VI部 平和研究

### 第10章 平和研究の地帯

日本の平和研究／日本平和学会／宗教と平和／文明論と平和研究／歴史研究と平和研究／戦争学と平和学／グローバル経済とジェンダー／科学者と平和／原子力の平和利用／平和主義／平和運動／ケアの倫理と平和の構想／日本の平和研究所／世界の平和研究所／海外の大学における平和研究／平和研究の課題

### 【付録】「平和研究」特集タイトル一覧

**参照・引用文献**／**事項索引**／**人名索引**

## 刊行にあたって(一部抜粋)

平和研究とは、何が平和を脅かすのか、そして何が平和の基礎となるのかを究明する学問です。研究機関(研究所)や学術団体(学会)の設立、学術雑誌の刊行、大学における教育プログラムの開設などを通じて組織化・制度化された平和研究を《狭義の平和研究》と呼ぶとすれば、その外側にはこれに関連する学術諸領域において上記の問いに取り組むさまざまな研究があり、これは《広義の平和研究》と呼べるでしょう。さらにその外側には、必ずしも上記の問いに動機づけられた学術研究ではないものの、特定の歴史的・社会的文脈におけるアクチュアルな平和言説(思想、運動、制度、政策など)があり、これをここでは《平和論》と呼ぶことにします(図参照)。

北欧、北米などにおいて狭義の平和研究が成立したのは、本書序章に配置された諸項目(特に「戦争・暴力・平和」,「変わりゆく時代を見つめる平和研究の眼差し」,「平和研究の再定位」,「平和論の歴史的文脈」)が解説する通り,1950年代の後半から1960年代にかけてのことでした。この狭義の平和研究に先行して、それに知的基盤を与えるものとして広義の平和研究(古典から一例をあげればI. カントの『永遠平和のために』[1795年])が既に存在していたことは言うまでもありません。そしてその広義の平和研究は、特定の学術領域の内部で行われていた訳ではないので、狭義の平和研究が学際的になることは必然的展開でした。(中略)

以下では、この事典の構成を説明するために必要な範囲で、狭義の平和研究と広義の平和研究との関係について簡潔に説明しておきます。平和研究の地平が、戦争と平和の問題から大きく広がったのは1960年代の末のことで、それはノルウェーの社会学者J. ガルトゥングによる平和の再定義を契機とするものでした。ガルトゥングは、戦争の不在ではなく、暴力の不在として平和を再定義したうえで、直接的な暴力(個人・集団の実力や国家の武力など)の不在としての消極的平和に、構造的な暴力(人間にとって自発的に同意しがたい社会的不正義)の不在としての積極的平和を対置しました。この平和の再定義が画期となり、戦時ではないにもかかわらず人間の尊厳の対等性が承認されない社会的不正義も平和研究の考察対象に包摂されるに至ったのです。狭義の平和研究が広義の平和研究として意識する範囲が拡大したと言えるでしょう。

もちろん、狭義の平和研究が、広義の平和研究の一層の進展に寄与するところがなければ、その知的伝播力は維持できるものではありません。そのためにも、現時点における平和研究の到達点を見定めておくことには大きな意義があると考えます。

本書『平和学事典』は、日本平和学会が2023年に創立50周年を迎えることを記念して刊行するものです。2020年の秋に、当時の竹中千春会長のイニシアティブの下で企画に着手しました。本事典の編集作業は、編集幹事、編集顧問、編集委員、編集補佐が担当しましたが、これら編集関係者はすべて本学会の会員です。その一方で、項目の執筆には多くの非会員のご協力をいただきました。ここに記して御礼を申し上げるとともに、本事典は、この意味でも「広義の平和研究」を含む平和学事典であることを強調しておきたいと思います。

日本語で刊行する本事典は、日本における平和研究の現在を確認するものです。その構成は、直接的暴力論を事典前半に、構造的暴力論を事典後半に配置するなど標準的なものとなりました。それは、ここに説明した歴史的経緯を踏まえればそれ以外にない自然なものです。その一方で、国際社会における平和論の歴史的な移り変わりと、平和の再定義をうけて再定位されてきた平和研究の広がりとを、一体のものとして捉えたとともに本事典の特徴を見出しただければ、編集に携わったものとして、それにまさる喜びはありません。

### 2023年2月

編集委員長 石田 淳

<p>414</p> <p>戦後史 戦後政治の展開</p> <p>四大大公害事件</p> <p>一・四・二公害事件 水俣病、イ・チ公害事件、四日市公害事件、新潟水俣病</p> <p>戦後日本で発生した公害事件の中で、最も重大な被害を引き起こした事件を併せて四大大公害事件と呼ぶ。それらは「水俣病(熊本水俣病)事件」「四日市公害(新潟水俣病)事件」「新潟水俣病(新潟水俣病)事件」「四日市公害(四日市ぜんそく)事件」の略称として「水俣病」「イ・チ」「四日市」「新潟水俣病」の略称で知られる。この四大大公害事件は、戦後公害の代表として知られる。この四大大公害事件は、戦後公害の代表として知られる。この四大大公害事件は、戦後公害の代表として知られる。</p>	<p>415</p> <p>戦後史 戦後政治の展開</p> <p>戦後の人口増加</p> <p>戦後の人口増加は、戦後日本社会の大きな特徴の一つである。戦後の人口増加は、戦後日本社会の大きな特徴の一つである。戦後の人口増加は、戦後日本社会の大きな特徴の一つである。</p>
--	--

<p>416</p> <p>戦後史 戦後政治の展開</p> <p>安全保障のディレンマと安心供与</p> <p>安全保障のディレンマとは、安全保障と安心供与の両方を同時に満たすことができないという状態を指す。安全保障のディレンマは、安全保障と安心供与の両方を同時に満たすことができないという状態を指す。</p>	<p>417</p> <p>戦後史 戦後政治の展開</p> <p>平和と論議</p> <p>平和とは、戦争や暴力の存在を許さず、互いに尊重し合いつつ共存する状態を指す。平和とは、戦争や暴力の存在を許さず、互いに尊重し合いつつ共存する状態を指す。</p>
---	--

<sup>[1]</sup> 戦後日本で発生した公害事件の中で、最も重大な被害を引き起こした事件を併せて四大大公害事件と呼ぶ。それらは「水俣病(熊本水俣病)事件」「四日市公害(新潟水俣病)事件」「新潟水俣病(新潟水俣病)事件」「四日市公害(四日市ぜんそく)事件」の略称として「水俣病」「イ・チ」「四日市」「新潟水俣病」の略称で知られる。この四大大公害事件は、戦後公害の代表として知られる。この四大大公害事件は、戦後公害の代表として知られる。この四大大公害事件は、戦後公害の代表として知られる。

<sup>[2]</sup> 戦後日本で発生した公害事件の中で、最も重大な被害を引き起こした事件を併せて四大大公害事件と呼ぶ。それらは「水俣病(熊本水俣病)事件」「四日市公害(新潟水俣病)事件」「新潟水俣病(新潟水俣病)事件」「四日市公害(四日市ぜんそく)事件」の略称として「水俣病」「イ・チ」「四日市」「新潟水俣病」の略称で知られる。この四大大公害事件は、戦後公害の代表として知られる。この四大大公害事件は、戦後公害の代表として知られる。この四大大公害事件は、戦後公害の代表として知られる。